

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：12604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25780500

研究課題名(和文) 演劇的手法の活用に関する授業論の構築と教師の力量形成の仕組みの開発

研究課題名(英文) Development of Instructional Theory and Teacher Training System on Drama Methods

## 研究代表者

渡辺 貴裕 (Watanabe, Takahiro)

東京学芸大学・教職大学院・准教授

研究者番号：50410444

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：小学校の国語、理科、外国語活動から高校の現代文や英語まで様々な教科・単元において演劇的手法を用いた授業を開発し、実践事例を創出して、考察を行った。演劇的手法の活用を図る教師のための、身体を動かしながら即興的にアイデアを出し合う活動試行などを含む、力量形成の仕組みを考案した。イギリスにおいて演劇的手法を学校改善のために役立てている事例やそうした学校をネットワークなどによって支援している事例を調査し、その特徴を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Lessons using drama methods in a wide range of subjects and units such as Japanese, English and science were developed and examined. Teacher training system on drama methods was devised where teachers create and experience trial activities through improvisation. Cases of school improvement through drama methods and support system for that in England were analyzed.

研究分野：教育方法学

キーワード：演劇的手法 ドラマ教育 演劇教育 身体性 想像力 教師教育

## 1. 研究開始当初の背景

かつては演劇というもっぱら舞台上演や人間関係・表現力向上のワークショップと結びつけられてきたのが、渡部淳ら『学びを変えるドラマの手法』(旬報社、2010年)や小林由利子ら『ドラマ教育入門』(図書文化社、2010年)などに見られるように、理解の深化や生きた知識の獲得を目的に演劇的手法を用いる取り組みが行われるようになってきている。授業における演劇的手法は、優れた実践事例によっても示されてきたように、全身の感覚を用いる点、他者と関わり合う点、具体的な文脈を伴う点で、いわゆる知識伝達型授業を変革する可能性をもつ。

にもかかわらず、依然学校現場においては、演劇的手法を用いた学習活動は、普通の授業とは別個のもの、身体を動かすことで息抜きになる「お楽しみ」的活動として受けとめられてしまっている場合が多かった。その背景要因として考えられたのは次の2つである。

1つめは、演劇的手法が授業論として鍛えられてこなかったということである。多くの場合、演劇的手法の推進者は、演劇的活動を行うことを所与の前提として考えているため、そうした手法を用いることの学習上の意義は何か、どんな長所・短所があるのか、どんな条件が整ったときに効果的に機能するのかといった問題に関して、十分な検討を行ってこなかった。

2つめは、演劇的手法を用いる教師の力量形成という視点の弱さである。演劇的手法を用いた活動のプログラム(一連の進行手順)には目が向けられその開発が行われるが、教師はどうすればそれを効果的に運用できるのか、さらに、教師はどうやって自ら演劇的手法の活用方法を考案できるようになっていくのかといった問題は、ほとんど扱われてこなかった。演劇的手法は、身体や声、即興的応答の役割が大きいという特性上、授業を行う教師自身のふるまいが重要となるが、その力量形成のプロセスが顧慮されていない。

研究代表者はすでに、こうした演劇的手法に関する授業論と教師の力量形成の重要性に着目し、イギリスのドラマ教育や日本の演劇教育の蓄積に注目して研究を進めてきた。また、2011年度からはより実践的な研究として、小学校から高校までの教師たちと、演劇的手法を用いた授業の共同研究を始め、2012年4月にはそのための研究グループ「学びの空間研究会」の設立に到った。しかし、日本の学校における、さまざまな教科・単元での演劇的手法を用いた授業の実践事例の蓄積や、それに対する授業論の立場からの検討はまだ課題として残されていた。

## 2. 研究の目的

上述の背景をもとにして、本研究では、次の3つを研究の柱として据えた。

### (1) 共同での授業づくりと授業論の構築

小中高の学校現場の教師たちと共に、さま

ざまな教科・単元において、演劇的手法を用いた授業の考案・実施・検討を行う。それにより、現在の日本の学校制度のもとで具体的にどのような形の学習活動が可能か、事例を蓄積し、演劇的手法を用いて授業改善に取り組もうとする教師のためのリソースを作成する。また、それらの事例をもとにして、演劇的手法を用いた学習活動の授業論を構築する。

### (2) 教師の力量形成のための仕組みの開発

教師が授業において演劇的手法を活用する力量を伸ばしていくことができるよう、「学びの空間研究会」等を実験的な取り組みの場として用いながら、教師同士で相互研鑽ができる仕組みの開発を行う。具体的には、指導案をもとにもっぱら口頭で討議を行うというのとは異なる、身体活動を伴った形での「事前検討」の仕方や、画像や映像を活用した実践報告の仕方などを開発し、教師教育の観点からそれらを意味づける。

### (3) 欧米のドラマ教育の状況の調査

(1)(2)の基礎作業に当たるものである。日本よりも授業における演劇的手法の活用に関して先行しているイギリス等での状況の調査を行う。イギリスには、一つの学校で演劇的手法を用いて授業改善に取り組むということにとどまらず、地区全体あるいは複数学校が連携してそれに取り組んでいる事例も見られる。そうした取り組みへの文献および実地調査を行う。

## 3. 研究の方法

### (1) 共同での授業づくりと授業論の構築

「学びの空間研究会」などすでに築いてきた組織を活用しながら、事前検討会での学習活動の考案、教師による各教室での実践実践報告と討議、というサイクルを年間6~10回程度行う。それにより、教師らと共に、さまざまな学校段階・教科・単元での、演劇的手法を用いた学習活動の考案を行う。教師らと共にそれを行うのは、これが、本研究の2つめの柱である教師の力量形成を兼ねているからである。

考案の際には、実際に動きながらアイデアを出していく、ワークショップ型の事前検討会を実施する。演劇的手法を用いた学習活動の考案および実施のためには、教師自身に、そうした活動を身をもって体験してそこでの出来事を省察するという経験が必要だからである。

教室での実践および教師グループでの討議の様子はビデオ等で記録し、授業論の観点から検討を行う。

### (2) 教師の力量形成のための仕組みの開発

(1)で述べたワークショップ型の事前検討会の様子をビデオカメラで記録し、教師が自ら身体を動かしながら考えることでどのように思考が誘発され、また、教師同士の相互作用が生じているのかを分析する。それを

もとに、教師の創造的思考を可能にする条件を明らかにし、検討会の進め方の改善を行う。さらに、演劇的手法を用いた授業のよりよい実践報告の仕方の検討も行う。

### (3) 欧米のドラマ教育の状況の調査

イギリスで行われている、演劇的手法を用いた授業改革・学校改革の取り組みに関して、実地調査を行う。パトリス・ボールドウィンがノーフォーク州で行ったD4LC(Drama for Learning and Creativity: 学習と創造性のためのドラマ)のプロジェクトや、ルーク・アボットらが「専門家のマント」に取り組む教師達のネットワークとして組織したMoE.comの活動などを取りあげ、関連校での学校公開日等に合わせて渡航し、授業の観察および関係者へのインタビューを行う。

## 4. 研究成果

### (1) 研究の主な成果

「共同での授業づくりと授業論の構築」および「教師の力量形成のための仕組みの開発」について。

もともと関西で開催していた「学びの空間研究会」の例会を、2014年度途中より関東でも開くようになった。研究期間中に、関西地区で18回、関東地区で13回の例会を催し、その中で、さまざまな教科・単元に関して活動試行 教室での実践 実践報告のサイクルを実施した。それにより、例えば以下の教材での実践が生み出された。

#### 【国語】

- 小2 「ふきのとう」(工藤直子・作)
- 小3 「きつつきの商売」(林原玉枝・作)
- 小5 「わらぐつの中の神様」(杉みき子・作)
- 小6 「やまなし」(宮澤賢治・作)
- 高2 「ヴェニス商人」(シェイクスピア・作)
- 高3 「紙風船」(岸田國士・作)

#### 【外国語活動・英語】

- 小5 Do you like ...? の表現を使った「お弁当づくり」
- 小6 「道案内」
- 小6 キング牧師の生涯をもとに
- 高1 PlayPumpの教材文をもとに

#### 【理科】

- 小3 「磁石の性質」
- 小4 「とじこめられた空気と水」

これまでも比較的多く取り組まれてきた小学校の国語や外国語活動だけでなく、高校現代文や小学校理科での実践を生み出している。

高校現代文では、戯曲そのものの上演を目的とせず、様々なテーマについて戯曲を手がかりにして探究していくような実践形態を開発した。

小学校理科に関しては、NPO法人「子どもとアーティストの出会い」と連携し、「ダンスで、理科を学ぼう」プロジェクトの一環として実施した。それにより、物理現象の予想や観察の際に身体の動きを用いることで身体感覚を伴った理解を図る実践形態を開発した。

これらの実践を教師たちが活動試行を通して生み出す過程を、「動きながら考える」、「協同によるアイデアの積み上げ」などの観点から特徴付けた。

「欧米のドラマ教育の状況の調査」に関して。

計3回イギリスを調査訪問し、ボールドウィンのD4LCやアボットのMoE.comに関して、ワークショップに参加したり関連校で授業観察を行ったり関係者へのインタビューを行ったりした。

D4LCについては、そのプロジェクトの開始から終結までのプロセスと、より効果的にプロジェクトを進めるためにボールドウィンが行った工夫、プロジェクト終了後の現在の様子を明らかにした。

MoE.comについては、まず、「専門家のマント」の元々の提唱者であるドロシー・ヘスカットはこれを授業における一技法にとどめずカリキュラム全体を再構成する原理として構想していたことを文献調査により明らかにしたうえで、近年のMoE.comの取り組みがそれを実際の学校において実現してきていることをフィールドワークにより明らかにした。

一方、理論研究として、ドラマを学習媒体として位置付ける立場の一つの源流であるギャヴィン・ボルトンの「理解のためのドラマ」論の検討を行った。それにより、これまで日本では注目されていなかった、ボルトンが挙げるドラマの3つのタイプの相互関係や理解の深まりの4つの段階について検討を行い、それが日本の議論に与える示唆を明らかにした。

以上のような研究の成果については、各種論文や教師向けの刊行物における発表に加えて、公益社団法人日本劇団協議会による3日間の連続ワークショップ(2015、16年度)や教員免許状更新講習「演劇的手法を活用した授業づくり」(2015、16年度)などにおいて実践的な形での還元も行った。

### (2) 得られた成果の国内外における位置付けとインパクト

本研究で行ったのは、海外等現在の日本の学校現場とは離れたところで開発された手法の直接的な移入ではなく、それらをふまえながら、現場の教師たちと共に行う、現在の日本の学校の文脈に即した演劇的手法の可能性の追究であった。しかもその際、研究者と現場の教師とが対一対一の関係で行うのではなく、同じ問題関心のもとに集まった教師たちのグループをベースにして、学習活動の

考案・実施・検討を行ってきた。そのため、実践事例の創造と教師の力量形成とが同時に行われることになったのは、本研究の成果の大きな特徴である。

なお、「専門家のマント」を取りあげた『教育方法学研究』所収論文(「主な発表論文等」の「雑誌論文」の )に対しては日本教育方法学会より研究奨励賞を受賞し、研究的にも高い評価を受けた。

### (3) 今後の展望

D4LCやMoE.comの取り組みの例からも言えるように、本来演劇的手法は、カリキュラムレベルでの位置付けを意識することで、単発の授業を超えたカリキュラム改善の手がかりにもなりうるものである。すでに、国内においても、そうした活用の仕方に関心をもち取り組みを始める学校が出てきている。そうした学校と連携しながら、カリキュラム論や評価論に関して、2017年度から2020年度の4年間の予定で新規申請し採択された科研費基盤研究(C)「演劇的手法を活用したカリキュラムとその評価に関する実践的研究」において、さらに発展させていく。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計4件)

渡辺貴裕「演劇的手法を用いた「深い」学習とはどういうものか G・ポルトンの「理解のためのドラマ」論をもとに」日本教育方法学会編『教育方法』第45巻、2016年、99-112、査読無し。

渡辺貴裕「文学作品を用いた演劇的手法を通しての話すこと・聞くことの学習の可能性 イギリスのドラマ教育における例を手がかりに」日本読書学会『読書科学』第58巻1号(通巻227号)、2016年、49-59、査読有り。

渡辺貴裕「イギリスのドラマ教育における「専門家のマント」の展開」日本教育方法学会編『教育方法学研究』第40巻、2015年、15-26、査読有り。 同学会より研究奨励賞受賞。

渡辺貴裕「教師が演劇的手法を使えるようになるための仕掛けづくり 「学びの空間研究会」の取り組み」日本演劇学会 演劇と教育研究会『演劇教育研究』第5号、2014年、16-24、査読無し。

### 〔学会発表〕(計6件)

渡辺貴裕「イギリスにおける「ドラマ・イン・エデュケーション」(drama in education)」をめぐる批判と展開」日本教育方法学会第52回大会、2016年10月1日、九州大学(福岡県福岡市)。

渡辺貴裕「仮想的な実践を通しての「実践の中の理論」の変容」全国大学国語教育学会第130回大会、2016年5月29日、新潟大学(新潟県新潟市)。

渡辺貴裕「イギリスにおけるドラマを通じた学校改善の取り組み D4LC(Drama for Learning and Creativity)の活動に焦点を当てて」日本教育方法学会第51回大会、2015年10月10日、岩手大学(岩手県盛岡市)。

渡辺貴裕「イギリスのドラマ教育における「専門家のマント」の展開」日本教育方法学会第50回大会、2014年10月11日、広島大学(広島県東広島市)。

渡辺貴裕「演劇的手法を用いた学習活動と評価」全国大学国語教育学会第125回大会、2013年10月27日、広島大学(広島県東広島市)。

渡辺貴裕「ドラマと国語教育の結びつき 虚構性を活用した「話す・聞く」能力の育成」全国大学国語教育学会第124回大会、2013年5月19日、弘前大学(青森県弘前市)。

### 〔図書〕(計8件)

川島裕子(編著)、中島裕昭、渡辺貴裕、高尾隆、鈴木直樹、中西紗織、田中龍三、石野由香里『教師になる劇場 演劇的手法による学びとコミュニケーションのデザイン』フィルムアート社、2017年、272(113-129)。

田中耕治(編著)、川地亜弥子、木村裕、二宮衆一、石井英真、樋口とみ子、遠藤貴広、伊藤実歩子、渡辺貴裕、吉永紀子『戦後日本教育方法論史(上)カリキュラムと授業をめぐる理論的系譜』ミネルヴァ書房、2017年、292(227-246)。

石井英真(編著)、大杉稔、原田三朗、黒田拓志、岸田蘭子、金大竜、渡辺貴裕、竹沢清、遠藤貴広、西岡加名恵、榎本龍也、北川千幸『小学校発 アクティブ・ラーニングをつくる教師を育てる 「研究する教師」へ』日本標準、2017年、199(118-129)。

田中耕治(編著)、赤沢早人、赤沢真世、石井英真、伊藤実歩子、遠藤貴広、奥村好美、川地亜弥子、木村裕、項純、趙卿我、鄭谷心、徳永俊太、西岡加名恵、二宮衆一、八田幸恵、羽山裕子、樋口太郎、樋口とみ子、藤本和久、細尾萌子、本所恵、渡辺貴裕『グローバル化時代の教育評価改革 日本・アジア・欧米を結ぶ』日本標準、2016年、292(196-207)。

高木まさき他(編著)『国語科重要用語事典』明治図書出版、2015年、280(83,129)。

渡部淳、獲得型教育研究会(編)、渡辺貴裕他『教育プレゼンテーション 目的・技法・実践』旬報社、2015年、264(140-146)。

渡部淳、獲得型教育研究会(編)、青木幸子、小松理津子、関根真理、田ヶ谷省三、高山昇、武田富美子、初海茂、藤井洋武、宮崎充治、両角佳子、横田雅弘、吉田真理子、和田俊彦、渡辺貴裕、辻本京子『教育におけるドラマ技法の探究 「学びの体系化」にむけて』明石書店、2014年、

256(109-121)。

武田富美子、渡辺貴裕（編著）、岩橋由莉、鈴木聡之、羽地朝和、藤原由香里、松山洋輔『ドラマと学びの場 3つのワークショップから教育空間を考える』晩成書房、2014年、300。

## 6．研究組織

### (1)研究代表者

渡辺 貴裕 (WATANABE, Takahiro)  
東京学芸大学・教職大学院・准教授  
研究者番号：50410444